http://www.gakurin.co.jp

NO. 158 共創ネットワーク

学林舎情報

●発行日：2015年9月19日（土）

〒661-0035　兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3　TEL 06-4962-5876　FAX 06-4962-5877　e-mail　info@gakurin.co.jp

発行：教材出版 学林舎

GAKURINSHA TOPICS

学習教育の行き先
2020年に向けて

文部科学省の動きを見ていると、どのような学習を小・中学校に指導したいのかが明確になります。2020年（2021年度入試）、東京オリンピックが開催される年にセンター試験が「（仮）大学入学希望者学力評価テスト」に変更されます。中でも英語に関しては、従来の「語句・文法などを問う問題」から「読む・書く・聞く・話すを基盤においた表現力を問う問題」に変わっていきます。従来の科目としての英語力ではなく、言語としての英語力が問われるのです。

2015年

センター試験・個別学力検査（2次試験）

▼

2020年

（仮）大学入学希望者学力評価テスト
面接・推薦書（在学中の学習記録など）
小論文・プレゼンテーションなど
個別学力検査（2次試験）

上記の図は、2020年におこなわれる大学入試に関して文部科学省が示しています。それを受けて、各都道府県の教育委員会の動きも活発化しています。特に英語に関しては、2018年を目標に中学校の英語授業を、すべて英語で指導するようにすすめられています。学校現場の先生からは、戸惑いの声が聞こえてきます。しかし、日本を取り巻く社会状況を見ると、全ての学習教育において、従来の暗記型学習から思考型学習にシフトすることは、必然です。

学習塾においては、選択を迫られる時期に来ているといえます。2018年から全国の中学校の英語の授業が全て英語で仮におこなわれるようになった場合、学習塾に対しても同じような環境やレベルが求められることは想像できます。他の科目においても「表現力」「判断力」「思考力」をどう指導するかを明確にしなければ、学習指導の信頼を獲得することは難しい状況になることも想像できます。従来の教科書、学校補完での指導を変えていかなければいけません。学習指導のテーマは明確です。「表現力」「判断力」「思考力」を教科学習を使ってどう育てていくのか、どう指導していくのかが求められるのです。（北岡）

学習教育の行き先
英語四技能化

英語四技能化（「読む」「書く」「聴く」「話す」）という言葉が、2020年に向けて動き始めています。英語四技能とは、グローバル社会に向けて必要な言語としての英語を小・中・高校の段階で身につけることを示唆しています。身につけるということは、母語である日本語と同じように、対話表現できるレベルまでもっていくということです。つまり、英語を母語とする子ども達と同じように英語で思考、判断、表現する力を身につけるということです。ハードルは確かに高いですが、ハードルを高く設定しなければ、ハードルを超えることはできませんし、ハードルを超えるレベルには到達しません。

大手、中小企業問わず、英語力は必須の時代です。対話表現できる英語力を身につけることによって、子どもたちの可能性は大きく広がります。指導する側にとっても同じです。対話表現できる英語力を身につけることによって、指導の幅は拡大します。（北岡）

学校教育の行く先
小・中・高一貫校化

小学校から高校まで一貫校化する動きが活発化しています。「義務教育学校」の名称で、小・中一貫校を制度化する法案が今年の６月に決定し、平成28年4月1日から施行されます。それに加えて、中・高一貫校化の流れは地域によって拡大していますので、小・中・高一貫校化されるのも時間の問題といえます。学校の統廃合の動きもそれに関連しています。文部科学省の資料から学習も含め、子どもたちが小学校から中学校に上がる際に、環境の違いによる問題に対応できていない状況があるため、それを小・中学校が連携することにより、解決したいと考えています。小・中・高が一本化することにより、入試という考え方は、一部の私立、国公立を除き、なくなっていくと考えられます。民間教育機関レベルにおいては、その動きが顕著に出始めています。学習塾においては、この数年で、未就学児童を指導する動き、特定の学校を目指した入試対策、特定の科目指導、そういった動きが活発化しています。従来型の補完指導（教科書）している学習塾は、価格競争、成績保証といった競争に巻き込まれています。その一方で、地域と連携した学習支援事業を学童保育と合わせて、大きく展開している塾・ＮＰＯ団体もあります。

文部科学省が示す「表現力」「判断力」「思考力」を育成する方向性は、学校の在り方、教科書の位置づけを大きく変えることになります。学校はより個々に対しての、学習・教育指導の強化を高めていきます。地域によっては、特定の塾と連携して、塾が学校の中に入り込んでいる状況も少なくありません。教科書においては、反転授業がどこまで定着するかはわかりませんが、仮に定着するのであれば、デジタル化し、自学学習ができるようなワークブックも含んだ形式に変化するはずです。

ただ、学校が変化しても、教科書のあり方が変わったとしても、普遍的な学習＝学びは存在します。その学びを提案、提供できるかが今後の教育企業の課題といえるのではないでしょうか。（北岡）

教育の行く先
サバイバルキャンプ体験

夏休み、小学生を中心としたサバイバルキャンプ体験の特集が関西のメディアを通して、いくつか取り上げられました。どのキャンプもそれぞれ課題や目的を示していましたが、「子どもの自立心を育てる」が根幹にあったように私は思いました。私が子どもの頃は、小学校の高学年にもなれば、子どもたちだけでキャンプまがいのことをよくしていたように思いますが、今の子どもたちを取り巻く環境は、どうもそうではないようです。今、子どもたちの周りに当たり前のようにあるもので、私たちの時代になかったものは、数え切れないほどあると思いますが、生活自体を決定的に変えたものを3つあげるとすれば、私は「携帯電話」「インターネット」「コンビニ」と。この3つが一般化することにより、私たちは「時間」「選択」「消費」に対する考え方が変わったように思います。いつでも、どこでも何かを選択して買うことができる。このことにより、食料も含めたモノに対する考え方が変わったように思います。そういった、生活の変化は今の子どもたちに大きな影響を及ぼしているといえます。極端な言い方をすれば、今の子どもたちの多くは選択はできても、自ら何かをつくりだすことはできない。つくりだすことができないということは、自己表現ができないということにつながってきます。こういった、不安を親御さんは大なり小なり抱えているため、サバイバルキャンプが存在するといえます。しかし、この問題は子どもだけの問題ではありません。こういった社会をつくりだしたのは大人であり、大人が変わらなければ、その背中を見ている子どもは変わりません。子どもだけのキャンプではなく、大人も必要といえます。一部企業では、新入社員にサバイバルキャンプを研修の中に取り組んでいるところもありますが、新入社員だけではなく、ベテラン社員も「自立心」を磨くことは必要です。教育がデジタル化していく中、真逆のアナログ教育が増えていくのではないでしょうか。大人も含めて、拡大しつづける消費社会に関して「？」をもっていることは事実です。この社会とどうバランスをとっていくのか？それとも社会が進む方向と真逆な方向に進むのか？私たちに問われています。（北岡）

国語を考えてみる

文／学林舎国語顧問　　森本　秀俊

ああ、素晴らしき哉、日本語⑰
－国文法は奥が深い！

突然ですが、次の問題にチャレンジしてみてください。

次の①～④の下線部の「れる」「られる」と同じ働きを持つ「れる」「られる」を使った文を、あとのア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① 弟はピーマンを食べ**られる**。
② いたずらをして母にしか**られる**。
③ ふるさとが思い出さ**れる**。
④ 先生はよく笑わ**れる**。

ア 明日、市長が来**られる**。
イ もっと速く走**れる**。
ウ ねこに足をかま**れる**。
エ 母のことが案じ**られる**。

いかがですか？　簡単にできたでしょうか。これは、いわゆる国文法における「助動詞」の問題です。助動詞と聞いたら、まずうかぶのが、can や must といった、英語の助動詞ではないでしょうか？　中学・高校時代に、英文法にはおおいに苦しめられた思い出があると思います。それに比べて、国文法はなおざりにされてしまっているような気がしてなりません。

それでは、問題を解いていきましょう。まず、①の「食べ**られる**」ですが、これは「可能」の意味を表す助動詞です。英文法でいえば can にあたるものですね。イの「走**れる**」が同じ可能の意味を表す助動詞です。次に②の「しか**られる**」は「受け身」の意味を表しています。英文法でいえば〈be 動詞＋過去分詞〉の形ですね。ウの「かま**れる**」が同じ働きをもつ助動詞です。

国文法の奥の深さが発揮されるのは、③の「思い出さ**れる**」からです。これは「動作が自然におこる」という意味をもつもので、「自発」の助動詞とよばれるものです。英文法では、このような助動詞は見当たりません。エの「母のことが案じ**られる**」の「られる」が同じ働きをしています。そして、④の「笑わ**れる**」は、相手の動作を敬う言い方、すなわち「尊敬」の助動詞で、一般的には敬語とよばれるものの１つです。英語には、日本語ほどのまとまりのある敬語表現はありません。アの「来**られる**」が同じ働きをもつ助動詞です。

答えは、① イ　② ウ　③ エ　④ ア　となります。

さて、さきほど、国文法が英文法に比べてなおざりにされてしまっているような気がすると書きました。これは、国語をしっかりと身につけるべき小学校の学習での国文法に対する「教える側」の意識の低さから来ているのではないかと、私は思っています。もちろん、中には国文法を徹底的にたたきこむ教育カリキュラムをもっている学校があったり、国文法に精通した先生がいたりするでしょう。しかし、全体として、やはり「なおざりにされている」という印象はぬぐえません。

私は、小学校の高学年あたりから、国文法を意識して勉強をすべきだと考えています。それは、「助動詞には、受け身、可能、自発、尊敬、使役、打ち消し、推量などがある」という知識を身につけるためだけではありません。国文法を意識して、言葉を書いたり話したりすることで、子どもの言語感覚は飛躍的に伸びていくはずです。日本語は，世界の言語の中でもかなり習得するのが難しい言語の一つだと言われています。私たちはその日本語を生まれたときから使って、自然に身につけているという幸運にめぐまれています。せっかく運をつかんでいるのに、国文法をなおざりにしておくのはもったいないとは思いませんか？

ああ、素晴らしき哉、日本語。（つづく）

算数・数学から見える世界

文／学林舎算数・数学顧問　深見 和孝

学林舎の代表的な教材に「単元別テキスト」というものがあり、全国の学習塾やご家庭で幅広く使われています。これは中学数学の教材で、文字通り「正負の数」「方程式」などの単元ごとの冊子になっています。１学年に７～８冊あるので、３学年分をまとめると結構な分量になります。

今回のコラムでは、この「単元別テキスト」を取り上げることにしました。教材について私があれこれ言うのはどうかなとは思いますが、私の知る範囲で意見を述べてみることにします。

私が「単元別テキスト」を初めて見たのは20年近く前、私がまだ 20 代のさわやかな若者であった頃です。学林舎という出版社を知る前のことで、当時の私は塾の講師をだらだらとやっていました。その頃に参加していた塾で私は高校生を教えていたのですが、あるとき、中学生の数学を担当していたＴ講師が「今年からこの教材を使って授業をすることにしたんや。」と言って見せられたのが、「単元別テキスト」だったのです。その塾は、20 ～ 30 人のクラスが１学年４クラス程度あり、数学専任の講師は私をふくめ４人ほどいたと思います。

「単元別テキスト」というのは塾教材としては一風変わった教材で、ひとことで言えば「自学自習用教材」です。ふつう、塾教材は一斉指導の授業に合わせて、先生が使いやすいように作られているのですが、この教材は生徒が使うことのみを前提に作られています。したがって、この教材を塾の授業で使うということは、授業の進め方を変えるということにつながります。

単元別テキストを使うことを決めたＴ講師は、集団一斉指導を続けることに行き詰まりを感じていたようで、塾生が減少していることもあって、思い切った方針変換をしたかったのだと思います。そういうわけで、その塾では中学生の数学の授業は、一斉指導から生徒の進度に合わせた教材中心の授業へと、授業スタイルを変更することになったのです。

さて、３月にスタートした最初の授業後に、その講師が興奮した様子で話しかけてきたのをよく覚えています。

「この教材はスゴイぞ。授業中いつもソワソワしていた○○君が黙々とテキストを進めているんや。今までと大違いや。」

スタートは大成功といった感じでした。私は高校生だけを教えていたので、直接に関わっていたわけではないのですが、とりあえずひと安心です。この調子で塾生が増えてくれればよかったのですが…。

ところが、１か月、２か月と経つにつれて、数学のコマだけを辞める生徒が出始めたのです。他の講師に聞いたところによると、「教えてもらえないのに、塾に来る意味がない。」と不満を口にする生徒が出てくるようになったようです。その講師も、黒板を使って全員に教えるのでなく、机の間をウロウロして個別に教えるスタイルに不満があるようでした。結局、この授業スタイルは１年後に取り止めとなり、塾生の減少という結果を残すこととなります。

今から考えれば、失敗の原因は、準備不足といいますか、動機が一斉指導の限界を感じたから変えてみたかったという安易さにあったのだと思います。現在、「単元別テキスト」を使って生徒に教えている先生方は、いろいろな工夫を取り入れておられるのではないでしょうか。

私自身、「単元別テキスト」を使って教えた経験は一度だけあります。ある私立女子高の講師をしたとき、高校１年の授業で１か月間、「１次関数」の単元を中心に使ってみました。ほとんどの生徒が「数学、わけわからんからキライ。」という状態だったので、困り果ててのことでした。授業は多少ザワザワした感じとなり、他の先生方の目が気になるところもありましたが、生徒はそれなりにテキストを進めてくれました。ただ、その内容を定期テストに出題したところ、熱心に進めていた生徒もそうでない生徒も同じように、その範囲での結果は良くなかったのです。採点しながら、テキストを進めているように見えても、身についていたわけではないことに気づかされて、ショックであり不思議であり、原因をいろいろと考えてみました。そして、「単元別テキスト」をよく見直して思ったのは、このテキストを進めるということは、「作成者の意図に沿って（作成者に誘導されて）、つまずかないようにする」ということ。「１本のレールに乗って、ひたすら前へ進んでいくような勉強の仕方」には、あぶなっかしい面があるということに気づいたのです。（つづく）

クロスロード Crossroad

第49回　文／吉田 良治

障害者スポーツ

2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されますが、どうしても注目度でパラリンピックに目が向けられる度合いが低くなりがちです。近年日本でも障害者スポーツが盛んになり、少しずつその認知もされてきましたが、運営や選手育成などの支援体制はまだまだ充実していません。

ノーマライゼーションという言葉をご存知でしょうか。北欧で1960年ごろに始まった取り組みで、障害のある人にも、障害が無い人と同じような暮らしができるように支援をすることです。2020年に東京でパラリンピックも開催されるので、日本のスポーツでもノーマライゼーションの充実が求められます。

以前神戸市灘区にあるスポーツセンターで運営に関わったことがあります。その施設には身障者体育館もあり、様々な障害のある方たちのスポーツ活動の場に、体育館が利用されていました。車いすバスケットやシッティングバレーボール、聴覚障害者バレーボールなどのチームの利用が多かったように思います。市民交流の場として障害者スポーツを体験してもらおう、という企画があり、車いすバスケットボールのチームが、市民との交流に参加されました。子どもや若者たちが車いすに乗ってバスケットボールをする、というものでした。日ごろ両足で立ち、走ったり止まったりして、ボールを投げたり受けることしかしていなかった子どもたちにとって、椅子に座った状態でボールを投げたり、受けたり、またシュートをするということはかなり難しく、大変苦労をしていました。また車いすは動作を静止していても、微妙に車が動きますから、その状態でのボールさばきは容易にできません。サポートした大学生（バスケットボール部員）も、車いすに座ってボールをシュートすると、ゴールネットにすら届かないケースが多々あり、立場が変わるとこんなにもうまくいかないものか、と苦労をしていました。

車いすはもともと足に障害がある方が使用します。車いすを使用したバスケットボールをはじめ、様々なスポーツで利用されるようになりました。足を使わなくて済むスポーツですので、車いすに乗れば健常者でもこのスポーツに参加できるということになります。オリンピックとパラリンピックは、健常者と障害者で参加する大会が分かれてしまいますが、障害者スポーツの中には、健常者が障害者と同じ条件で参加すれば、車いすバスケットボールのように、障害者と対等な競技に変化できるものもあります。ブラインドサッカーもゴールキーパーやコーラーそしてコーチで、視覚障害のない健常者が参加することも必要になります。ルール上は参加が認められていませんが、健常者も目隠しをして対等な立場になれば、他のポジションを体験することも可能で、視覚障害者の立場を理解する点では、先に紹介した車いすバスケットボール体験と同様、大切なことと思います。

健常者と障害者の垣根を取り除くという意味では、オリンピックとパラリンピックを融合することも意義が出てきます。同じ種目で競い合うことは無理でも、例えばオリンピック陸上１００m決勝の直後、もしくは直前に、パラリンピックの決勝を行う。マラソンはオリンピックとパラリンピック（車いすマラソン）を同時スタートをするといった、同じ舞台を一緒に共有するということもあっていいのではないでしょうか。全ての競技を合わせるというのは、スケジュール上難しいかもしれませんが、一部でも開催が実現できれば、スポーツのノーマライゼーションの真価となるはずです。（つづく）

吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した、ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。
全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog
http://ameblo.jp/outside-the-box/